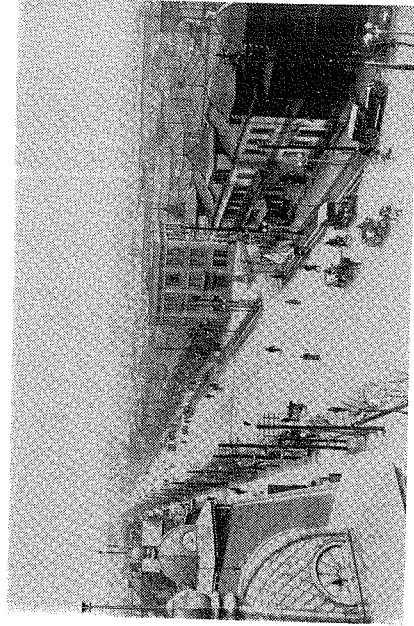


十四(明治)類、柳、柳るす證を響影の風西南南るけに於に地屬附天奉  
 俄丁二ちかこは(學大科醫洲滿の後)堂學醫滿南(影最年三  
 だつあで物築建大の中野のしをまき吹く全は時當し位に方右の



木樹斜傾の年往、れらめ埋で物築建り限寸渡見——天奉の在現  
 し残もを物一ーるけつを當見れてら去り葬に下の會都のこは原の  
 といなみて

## 序

滿洲は東洋史上における活火山の如き存在である。往昔女真又は女直と呼ばれ、董蒙なる變境の如く考へられてゐた滿洲族の中に努爾哈赤が現はれ、後金國を建て、その勢ひ南漸するに及んで遂に明朝に代り支那四百餘州に號令するに至つた。その間、凡そ三百七十年の久しきに亘つて清の社稷を保つた事實は、滿洲族の活躍現象が當時最高に達してゐたものといはれよう。かくてひとり支那史における顯著なる跡を遺してゐるだけでなく、滿洲國最近の進運は世界のいぶきに重大なる影響を興へつゝあるのだ。過去の歴史に大なる足跡を止めてゐるばかりでなく、將來の滿洲は世界の滿洲たるの聲えとしての豫感を興へてゐる。こゝに昭和九年三月一日滿洲帝國が建設され、かつて支那全土に幼くして君臨したまへる

溥儀皇帝を、第一世皇帝としてあぶぐ事は、歴史哲學の深淵なる意義に觸れしめる次第だ。願れば清朝終りを告げ中華民國の興生したのは一九一三年、爾來二十有餘年の間、東亞において、ま

た歐洲においても革命的事變の頻發に遭ひ社會的にも政治的にも面目を一變せるところが少くない。余が滿鮮に縁をもとめて渡つたのは日露戰役直後であつた。駐ること七年、常に山野を跋涉して大陸の風物に研究調査を續け、その資料を携へ歐米に學ぶこと更に七星霜、歸來再び滿洲をおとづれた時、余は各地の文化施設に接して全く隔世の感を禁じ得なかつた。その後滿鮮を往來すること九度、しかもその度毎に面目の益々改まりゆくを認めた。たゞ山峯、河川、大陸に推移する生物風景のみは二十數年前の面影をさながらにとどめてゐる。そのなつかしき自然に擁かれつゝわが半生の奮闘を回想するとき實に滿洲國土の變遷進況がその背景たるを痛感し、一層この大陸に對する關心を深刻ならしめた。ましてや滿洲國の建國以來すでに三度大阪毎日新聞社、東京日日新聞社の社命を帯びて親しくこの新興國の實情に觸れ、見聞資料に新規を加へ、これ等所感を記録するの要を認め「新しく觀た滿鮮」なる題名の下にこの一書を編むに至つたが、一面の動機は最近の所見を一括して報告に代ふると共に滿鮮往來の都度浴したる幾多の人々の好意に酬いんとする念願に出でたもので、自然、書中の挿畫の一々はその旅中におけるスケッチをその

まゝ製版にうつし、相知れる人々への笑ひ種とし、また思出の資ともならんことを期した次第である。

此の著を編むに當り貴重なる資料を興へられたる李文權氏並に渡滿を共にして終始適當なる題材の蒐集に努められたる岡村勇氏の好意に對し深謝す。

滿洲國帝政實施の日、大阪において

眞 琴 譏

## 目次

蝸牛旅行	一
トンボ返りの賭夫	二
警 官	七
アンペラ帽の論客	一〇
常世を探る	一四
十三歳の將軍	一七
姐さん水を一ぱい	二〇
自然兒の典型	二三
驢 馬 翁	二〇



橋頭の一夜	四
眞つ裸で馬賊の前へ	四
滿洲船の女が運ぶ草まんぢゆら	五
摩天嶺を弔ふ	五
山中の老師	六
流轉の宣教師リケガール	六
明暗二景	七
風風山	七
時ならぬ特別列車	八
葡萄の杖―學良に絡む秘話	八
<b>大陸の花春秋</b>	九

一月 水仙	九
二月 福壽草	九
三月 山慈姑	一〇
四月 白頭翁	一〇
五月 いはやつで	一〇
六月 芍薬	一一
七月 絳草	一六
八月 龍芽草	一三
九月 高麗菊花	一三
十月 龍膽	一六
<b>大陸の動物風景</b>	一六

和合玉を轉かす夫婦虫	三元
蠟	三元
大野をうたふきりくすの珍種——梓蠶、胡蝶、蠅	三元
朝鮮ボンビナ	三元
傳説の雉	四元
靈鳥 鶉	四元
大擧して移る沙鷄	五元
朝鮮の虎・滿洲の虎	五元
<b>大陸の驚異</b>	六元
氷の嵐	六元
滿蒙の暴風	七元

洪水と生物界	七元
金剛山	八元
金剛山の通路——金剛山探勝日程——主なる文獻	
<b>滿鮮年中行事</b>	九元
<b>大陸に翻る日の丸</b>	九元
<b>非常時を忍がく</b>	九元
鬼哭 嗷々	九元
匪賊討伐に係る地圖	
<b>移民私觀</b>	九元
なだれ込む山東移民(其の一)	九元

なだれ込む山東移民(其の二).....	二四
<b>土をこねる民族</b> .....	二九
満洲・支那.....	二九
泥の家―穴を掘つて住む―西安聖廟の大瓦―	
土の塔―土の長城	
朝鮮.....	三〇
<b>農業異聞</b> .....	三三
朝鮮の小馬と世界的な役牛.....	三三
大陸を耕す.....	三五
農家の水車.....	三六
ジャンクの帆車.....	三六

附 世界一の大水車.....	三五
將來の大風車.....	三五
畚・田・火 田.....	三六
<b>冬を生きる</b> .....	三九
寒冷の殺菌力利用.....	三九
氷を割つて漁業.....	三九
冬の山仕事.....	四〇
天恵の獸皮.....	四〇
寒冷利用のトビック.....	四二
文明を尺度としての乗物.....	四三
馬の鞍・驢馬騾・駱駝籠・一輪車・花轎・	

車轆・幌馬車・騾轎・泥轎	二四一
附 支那象・戦象	二四
<b>世界無比の書道</b>	三〇
看板 岳飛・李鴻章・徐世昌	三〇
福壽	三〇
吉祥語	三〇
辛未年羊頭泉範	三〇
泰西よりも前に發明された朝鮮の活字	三〇
<b>異俗畫記</b>	三一
官帖を焼く	三一
鳴綠江の鵝飼	三五

朝鮮のギヤングぬぐて	三六
名物山楂	三六
巨材の棺	三〇
支那劇の約束	三三
湯を賣る	三三
國境に描く	三六
ロシア化した成吉思汗料理	三六
勞農露國の鞭	三七
薄笑ふもの	三六
<b>大陸によめる歌</b>	三三
朝鮮樂浪の古墳	三三

朝鮮石窟庵	三三
日露戰後七瓦昌圖に駐まれるをしのび	三五
蒙古僧奉天黃寺に入來	三六
日滿親善學童使節を伴ひて	三五

## 挿繪目次

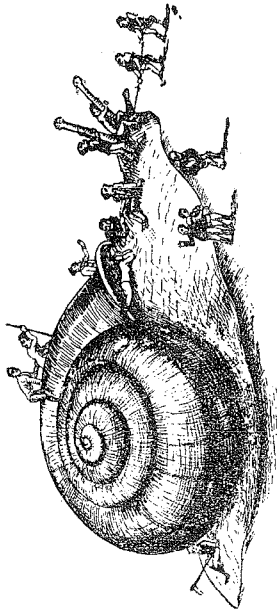
滿洲帝國溥儀皇帝御筆	口繪	一	水 仙 圖	二四
武藤元帥書	口繪	二	福 壽 草 圖	二六
本庄大將書	口繪	三	あ ま な 圖	二七
宇垣朝鮮總督書	口繪	四	ひろはおきな草圖	二八
鄭滿洲帝國總理大臣書	口繪	五	いはやつで圖	二九
奉天の今昔(寫眞)	口繪	六	芍 藥 圖	三〇
蝸牛の圖		一	おぼけたで圖	三一
奉天停車場待合室風景		二	きんみづひき圖	三二
常世を探る圖		四	高麗菊花圖	三三
鯉を捕へる圖		七	龍 膽 圖	三四
鹽馬翁圖		六	鱈頭魚、鱈鱗魚圖	三五
ねちあやめ圖		七	夫 婦 虫 圖	三六



サソリ圖……………	二四	朝鮮風揚圖……………	三〇	12
滿洲きりぎりす圖……………	二五	祀神用字……………	三〇	
朝鮮ボンビナ圖……………	二五	花と人の圖……………	三〇	
高麗雄圖……………	二五	勤農旗をたてる村の圖……………	三〇	
かきまぎ圖……………	二五	朝鮮の左官圖……………	三〇	
沙鷄圖……………	二五	朝鮮大工圖……………	三〇	
虎圖……………	二五	滿洲樂器圖……………	三一	
遼河堤上奇柳の寫眞……………	二五	渡來蒙古僧圖……………	三一	
水の嵐寫眞……………	二六	關帝の圖……………	三一	
金剛山地圖(二色刷)……………	二六	賈猪頭圖……………	三一	
増福財神圖(二色刷)……………	二六	朝鮮花嫁圖……………	三一	
桃符圖……………	二六	苦力團樂圖……………	三一	
龍燈圖……………	二〇〇	神茶像圖……………	三一	
朝鮮松圖……………	二〇一	彌樓の圖(寺内後四師團長所藏)……………	三二	

兵匪動靜要圖(其筋の許可を得て掲 ぐ)……………	三〇一	續車圖……………	三〇	
滿洲移民圖……………	三〇	ジャンク帆風車圖……………	三〇	
山東移民圖……………	三〇	ロシア計劃大風車圖……………	三〇	
山東苦力圖……………	三〇	慶州出土駱馬人物圖……………	三〇	
穴居圖……………	三〇	驢馬上の田主圖……………	三〇	
西安聖廟瓦圖……………	三〇	山籠圖……………	三〇	
白塔圖……………	三〇	滿洲かまぼこ馬車圖……………	三〇	
朝鮮風俗圖……………	三〇	滿洲幌馬車圖……………	三〇	
麩を作る圖……………	三〇	岳飛書……………	三〇	
麩を賣る圖……………	三〇	李鴻章書……………	三〇	
朝鮮小馬圖……………	三〇	徐世昌書……………	三〇	
世界的役牛圖……………	三〇	壽老人福圖……………	三〇	
滿洲農民耕作の圖……………	三〇	吉祥語……………	三〇	
		羊頭泉(範(寶照氏藏))……………	三〇	13

民国紙幣を焼く圖	三〇二
鴨綠江鵜飼圖	三五
ヌクテ圖	三六
熊と闘ふ圖	三七
山楂賣圖	三九
棺を掘く圖	三〇
支那劇囃方圖	三三
滿洲人湯賣圖	三四
樂浪那墳碑の彫刻圖	
石棺彫刻圖	三四
ロシア成吉思汗料理圖	三六
勞農國鞭圖	三六
うすわらぶ者圖	三六
櫛の招牌	三六



## 蝸牛旅行

天幕かついで米しよつてのそりくと出かけたら  
 大方雨に見舞はれてデン／＼虫に似申した

夕焼雲の入道が向ひの山にヌツと出た  
 これなら明日は日和らしこゝらあたりで陣取らう

谷間に下りて水を汲む唄の得意がうたひ出す  
 こだまの奴は物ずきに一々それを繰りかへす

「始自屋漏達於天地。」といふ句は明季迪の句であるかれは屋根の修繕に土を用ひ大は同じく土の利  
用を萬里の長城の造營にも及ぼしてゐることは甚だ味ある事實といふべきだ。

黄土の存在は支那においては絶対的の基調である、五行説に天地間は木、火、土、金、水が循環  
流行して停まることなく、萬物これより生ず、とある。この五行に配する時、地を中央におく、  
而して地は黄色なれば「中央の色」の意がある。又次老は黃髮であるから金毛といひ、壽老の稱  
になつてゐる。古聖軒轅氏を黃帝とあがめられ、これを祖とする神仙術を「黃」といふ。又九星  
の中で——一白(水)、二黒(土)、三碧(木)、四綠(木)、五黃(土)、六白(金)、七赤(金)、八白  
(土)、九紫(火)と並べて見ると、五黄土を中心としてその周圍に他の八星が配列されてゐる。か  
くの如く黄土は大切に取扱はれてゐる。即ち黄色は帝王の召される黃袍の色であり、また宮殿の  
屋根瓦の色もこの黄色を用ひられ、民間ではこれを利用することが出来ないとされてゐる。

これを考へても、黄土と人生なる問題には、大きくかつ深いものが包藏されてゐる次第だ。

## 二、朝鮮

朝鮮は大陸の海に迫る半島をなしてゐるだけに、氣候、風土の上に趣きを異にしてゐる。土を利用  
することもずつと小品的にごちんまりして來る。私は土と朝鮮人とを併せ考へる時に、かの高麗燒

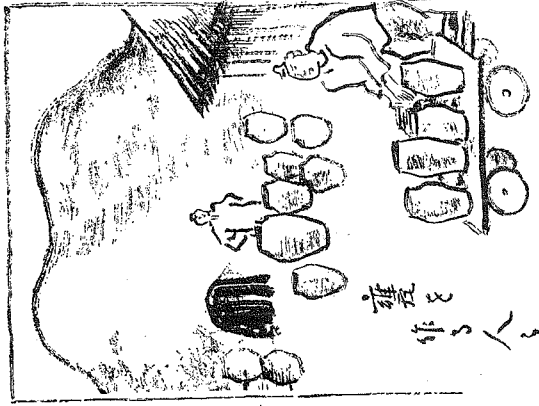


の存在を見のがすことが出来ない。その氣韻において、そ  
の幽雅な點において蓋し斯界の最高を示すものであらう。

一面から見ればこの藝術を通して朝鮮民族の優秀な程度が  
測らるゝ次第だ。

朝鮮を旅行してゐると、甕を多く利用してゐることが特に目に立つ。小甕に水を入れ頭にのせ  
て運ぶ女性を認める。甕を賣る店であるかと疑はれる程多數の甕をおしならべてゐる富豪がある  
何が納まつてゐるかを訊ねて見ると悉く漬物である。朝鮮では十月に沈菜といつて大根や青や白  
菜に蒜、胡椒を交へて一年中の使用に足るだけの漬物をするのを大切なる行事としてゐる。朝鮮

人には一族相扶養する習慣があつて、一人の成功者があればその同族の人々は相率ゐてその家に寄食する。稀には一家に二百人から居住してゐる例があるから、自然遺物も多く漬けねばならな



いわけだ。郷には郷約があり、親族間には互助法があつて、進んでこれを実行してゐるから、朝鮮は都鄙を問はず錢はなくとも施與を惜まない美風が行はれてゐる。但しこの結果自立自營の心がやうやく消磨されつつあることは惜むべきだ。

大同江を船で下ると沿岸に甕を賣る家をいくつも透迎する。田舎に旅をしてみると屢々甕を焼く窯の相ならぶ村に行きつく。

鴨綠江を渡る船には甕のみを積んでゐるものも認めることがある。ちげに積めるだけ甕や鉢を荷造つて運ぶ労働者を見る。朝鮮スケッチの中からもしこの甕の風景を抜き取れば雌蓋か雄蓋の不

足をしてゐる花に對する淋しさである。彼等の生活に大切なる甕はこれまた、必要と趣味と資料とを基調として生れたもので、土と人生との一面を語る資料であるのだ。支那は日本紀元前二十年の頃既に陶器があつて燧人氏の時始めて火食のことが行はれてゐる。垂仁天皇三年(西曆二七



年)新羅王子の歸化の頃から日本の製陶法は面目を改めてゐるが、この時代における朝鮮には素燒及び釉藥を施した陶器が出来てゐた。朝鮮の美術を論ずる者は必ず高麗燒の風韻の高雅なるを以て世界の鑑賞家の定評である程であつたが、李朝中葉から陶磁器業が廢頽した。近年總督府においては、これが原料を調査して

大いに獎勵した結果、現今では品質は次第に向上して産額も大に増加しつつある。朝鮮硬質陶器製作の如きも亦次第に有望の度を高めて來た。煉瓦土管の原料の如きは勿論、その他窯業原料として、土石が到所に多量に包藏されてゐることは甚だ意を強うする。窯製品に優秀なるものを出した事實があり、しかもその資料の豊なるところに斯業の將來は大に祝福されてゐる次第だ。